

第2回「万葉集・明日香村」を中心とした授業づくりセミナー 概要報告

大西 浩明

- ◇日 時 2024 年 7 月 13 日（土）10：00～12：00
◇場 所 県立万葉文化館
◇参加者 【学生】東、田中、坂本
【院生】伊藤
【現職教員】平井
【万葉文化館】井上、阪口、中本
【大学教員】米田、大西 計 10 名

- ◇内 容 万葉文化館の展示物の解説、万葉集に関する情報提供

エントランスには、陶板画で「飛ぶ鳥のあすか」と詠まれることにちなんだ白鳥の飛翔の様子や、古代の国際交流を象徴する遣唐使船の姿が表現されている。

今回は、研究員の方々から、展示物に関する詳しい説明をしていただきながら、「万葉集とは何か？」という基本的な問いに答える形で進められた。



・万葉劇場 「万葉のヒロイン 額田王」

飛鳥の時代、大海人皇子、天智天皇兄弟に愛された額田王を主人公に演じられる。

あかねさす 紫野行き 標野行き 野守は見ずや 君が袖振る（額田王）

紫草の にはへる妹を 憎くあらば 人妻ゆゑに われ恋ひめやも（大海人皇子）

君待つと わが恋ひをれば わが屋戸の すだれ動かし 秋の風吹く（額田王）

などの歌が取り上げられている。一人の女性をめぐる兄弟の葛藤、皇位争い、そして古代史上最大の戦い「壬申の乱」と、大きく揺れ動く歴史の中を、運命に翻弄されながらも珠玉の歌を詠み続けた額田王が、晩年どのようなことを感じていたのだろうかと考えさせられる。

・歌垣



市のように人が多く集まる場所では、楽器を持って集まった人たちによって歌垣（歌の掛け合い）が行われ、男女が恋歌のやりとりをした。

声に出し、節をつけてうたう「うた」こそが、万葉集の歌であり、今の私たちがリズムやメロディーにのせた言葉を身近に感じることに同じである。

・古代発音の復元を聞く

あしひきの 山のしづくに 妹待つと わが立ち濡れし 山のしづくに（大津皇子）

この歌を6通りの歌い方（古代発音、古代発音にメロディーをつけて、ラップ調、フォークソング調

など）で聞くことができる。実際の歌い方（メロディー）は不明だが高低はあったようで、今よりも音の種類が多く、言葉の発音が今とは異なっていたことが推定される。

- ・手回し絵本で万葉集の浦島を読む

万葉集には、「浦島子（うらのしまこ/うらしまのこ）」のように、歌自体が長大な伝説になっているものもある。誰もがよく知る「浦島太郎」のように、亀も出てこないし、最後が「命死にける」とあるように衝撃的である。万葉集には、歌の前に置かれる題詞が長い説明になっているものもある。



- ・タッチパネルで万葉集の表記を知る



万葉集はすべて漢字で書かれてあり、意味のある漢字（山）や万葉仮名（夜麻）だけでなく、書き方には様々な工夫がされていた。

例：「寒過（ふゆすぎて）暖来良思（はるきたるらし）」

外国語の文字だった漢字を使って、なんとか自分たちの言葉を書き表そうとした試みに、当時の日本人の発想の豊かさを感じる。

万葉集・・・全 20 巻 約 4500 首

雑歌（公的な儀式の歌、旅の歌など）、相聞（恋の歌など）、挽歌（死に関する歌）など

短歌（5・7・5・7・7・）、長歌（5・7・5・7・……・7・7）、旋頭歌（5・7・7・5・7・7）など

歴代天皇や貴族、役人や兵士、農民など様々な人の歌

現在の宮城県から鹿児島県までの地名が詠まれている

男性も女性も歌を詠んで残しているのは、当時としては世界的に見ても珍しい

半分の約 2000 首に植物が詠まれている

奈良時代に書かれた原本は残っていない。いろいろな人が写した「写本」によって伝わり、江戸時代に印刷され（版本）今に至る。 など

- ・飛鳥池工房遺跡

南地区の工房跡（7世紀後半）と北地区の飛鳥寺関連の施設跡に分けられる。南地区からは工房で使われた原料、製品、廃棄物、工具などが多数出土した。日本最古の鑄造貨幣「富本銭」がこの工房で生産されていたことが分かる。また、ガラス玉やメノウ・コハクなどの宝石類も取り扱っていて、ガラス玉は原料となる石英も発見されているため、ここで原料から製品まで一貫して作っていたようである。

